

さぬき市に伝わるふるさとの民話

現在のさぬき市があるのは、それまでの長い歴史があるからです。

その歴史の一端を伝える民話や伝説。その中からふるさとに伝わるお話の一部をご紹介します。

出典：ぶらり讃岐の民話とむかし話・さんがわの文化財

海女の玉取り

天智天皇のころ、「面向不背の玉」という中国に二つとないという宝物がありました。この宝物を積んだ船が玄界灘を渡り、瀬戸内海を通り、志度湾の沖にさしかかったとき、にわかには暴風雨がおり、竜神によってこの宝物が奪われてしまいました。都の貴族であった藤原不比等（淡海公）は、この玉を取り戻そうと身分を隠して志度浦を訪れ、ここで漁師の娘（海女）と夫婦となり、房前という男の子が生まれました。親子水入らずで暮らしていた不比等は、ある日、自分の素性と玉の行方を探しに来たことを妻に話したのです。すると、海女は玉を取り返してくる代わりに、房前を藤原家の跡取りにと頼み、竜宮へと潜っていきました。命綱をつけた海女からの合図で、不比等が急いで綱をたぐると、哀れに手足を食いぢぎられた海女が浮かび上がり、縦横に切った乳房の中に奪い取った玉を隠していたのです。そして、海女は不比等に抱かれて息を引き取りました。玉は無事に都の興福寺に納められ、後年に房前は藤原家を継いで大臣にまで出世したということです。

細川国弘物語

四百年ほど昔のこと、石田の地頭細川則弘の城に男の子が生まれ、名前を国弘とつけました。国弘は、武芸に富み勇気ある武士に成長しました。十三歳の時、夢の中に石田神社の神様が現れ、金の弓矢をいただく夢を見ました。目が覚めると、神の枝がおいてあり、それより弓の練習を積み重ね、弓の名人と言われるようになりました。十八歳の時には、小倉を通っていると、老婆の妖怪が現れ、国弘が石を投げつけると飛び去って、今度は馬になって驚かせてきました。その馬を投げると大きな石になってしまい、これを「おんば石」と呼んでいるそうです。畑の中の石は、何度動かしても元の所へ戻り、今も小倉の道端に置かれています。また、ある時は、村の人にいたずらを繰り返していた小法師二人の妖怪が現れたので、二人を両手に掴んで池に投げ込みました。すると、大きな一人の巨人になったので、国弘は秘術を使って封じ込めました。それ以後、妖怪は現れなくなり、その妖怪の入った池を「足跡池」と呼び、上上内の東南にあります。国弘は村人を集めて、弓の腕前を披露して、喝采を浴びたこともありました。国弘のお墓は上上内にあり、今でも信仰されています。

サル・タカ合戦物語

津田の北山の沖に浮かぶ二つの島のお話。むかしむかし、北山曾根の沖の二つの島に、サルとタカが住んでいました。手前の島にはサルが住んでいたのが「猿子島」。沖の島はタカが住んでいたのが「鷹島」といいました。猿子島には、木々が茂り木の実がどっさりとなり、磯にはハマグリがどっさりあって、魚も島の磯に押し寄せてきました。鷹島に住むタカは気が荒く、いつもけんかをして、山は岩肌となり、磯にも魚が寄りつかなくなってしまいました。そうすると、隣の猿子島が欲しくなってしまったのです。そこで、タカたちは猿子島をぶんどろうと襲って来ました。サルを見ると片っぴしから、鋭いくちばしで頭をつつきます。サルたちは石つぶてを投げて懸命に戦いましたが、鋭いくちばしと自由に飛び回れる羽にはかなわなかったのです。木の実はとられ、ハマグリも魚も持っていかれてしまいました。けれど、サルは黙って我慢しました。やがて、サルの頭がはげしまうと、猿子島のてっぺんも木が枯れてはげ山になってしまいました。すると、タカたちは西の方をさして飛んでいったそうです。だから、今でも猿子島は、はげ島なんだということです。

みろく池の大蛇

広大なみろく自然公園の園内には県下でも有名な「弥勒池」というため池があります。このみろく池が、今のような立派な堤ではなかった遠い昔のこと、この池に大蛇が住みつきました。大蛇が住みつくると、日照りが続いたり、大雨が続いたり、いろいろな災いがおこって人々は困っていました。あるとき、一人の修験者が、お四国巡りの途中でここを通り大蛇の話聞き、「私が弘法大師のお力におすがりして、大蛇を調伏（とりおさえる）しよう」と申し出ました。村人たちは、大蛇を怒らせることになったら大変だと心配しましたが、結局この修験者をお願いすることになったのです。修験者は「七日七夜、だれも近づいてはならぬ」と言って、池の堤に登り、それから山の中に入りました。七日七夜がたち、その真夜中に大きな地響きと大雷雨がひとときありましたが、その後は静かになりました。八日目の朝のこと、修験者が堤に立って手招きをしています。村人たちが登って行きますと、池の渚に西の方に向かって大蛇のうろこが残っているのが見えました。修験者は「もう大蛇はけってすまぬから安心するとよい」と言い残して去って行きました。その後、村人たちは「あの修験者さんは、弘法さんが姿を変えて見られたんじゃない」と言い伝えたということです。

桂洞法印のはなし

亀鶴公園のほど近く、宝蔵院さんと呼ばれる極楽寺に「桂洞法印」というお坊さんがおりました。今から三百年余り前のこと、高松藩の殿様が高野山からお迎えした偉いお坊さんで、里の人々からも慕われておりました。あるとき、琴平に出かけることになり、泊まることになったのです。その夜中、小僧さんが目を覚ますと、桂洞法印さまの姿が見えせん。慌てて探すと、縁側の戸を開けて東の空をおがんでいる法印を見つけました。どうなさったのかとお尋ねすると、「宝蔵院が燃えている」と言って、自分の衣の袖を小僧の頭にかきました。すると、小僧さんにも燃えている寺が見えたのです。法印は、ご本尊だけはお助け申しあげねばと、衣の下から一枚の白紙を取りだすと、それで鳥を折って東の空に向かって投げ飛ばしました。その頃、火に包まれた極楽寺に、西の方から白い鳥が飛んできて、本堂からご本尊を乗せて運び出したということです。翌日、寺に戻った法印は門に立っていた仁王に、「讃岐まで連れてきたのに、二人もおって寺の守りができなんだかあ」と大声で叫びました。仁王はじだんだ踏んで悔しがりましたところ、「喝！」と法印の一撃が飛んだので、仁王の足は止まり、その片足は紙の厚さだけ持ち上がったままだということです。